

教育ごっこを超える可能性はあるのか？

身体化された知の可能性を求めて

Beyond Educational Pretend Play: Towards Embodied Knowledge

鈴木 宏昭 (青山学院大学)

Hiroaki Suzuki (Aoyama Gakuin University)

1. はじめに

私は認知科学の観点から、知識の獲得、利用、変化についての研究を行ってきた。また大学教員として、様々な教育関連分野の研究者らとともに、レポートライティングを中心に教育実践を重ねてきた。

今回の報告では、こうした学問的、実践的な蓄積から、大学における教育と学習の課題についてやや過激な問題提起を行う。

2. 素朴教育論に基づくごっこ遊び

人は日常の経験を通して様々な信念を獲得し、それを体系化している。そうしたものを素朴理論と呼ぶ。教育についても同様の素朴理論が存在する。その一つは「教えれば人は学ぶ」、「教える事柄を要素に分解して、基礎から順番に教える」、「教えたことを確認することが大事」などは代表的なものであるし、プログラム学習などではこうした素朴理論を基盤とした教育が目指された。

しかし「教えること」、「基礎から教えること」、「確認すること」は学習や習得の十分条件でないのはもちろん、必要条件ですらない。こうしたことは、自らが行う教育実践においても確認できる。要素スキルとその評価に基づく授業案に従っても、また学生がそれに従って課題をこなしても、それは要素スキルの習得ができたことに留まることが多く、本来目指した包括的理解には至らない。つまり教育ごっこをしているに過ぎない可能性が高い。

こうしたジレンマは、今から 30 年以上も前に、日本の認知科学のパイオニアの一人である佐伯胖によって指摘されていた。彼は、日本の教育工学の生みの親とも言える坂元昂との対談で、教育と学習についての根源的な問いかけをしている。彼の話は概略以下の通

りである。もし人に熱を出させ、鼻水を出させ、咳を出させる薬も与えたとする。すると彼は風邪を引いたということになるのだろうか（いやならない）というものである。

要素的スキルの習得と包括的な理解の間の複雑な関係について、この比喩は重要な視点を提供している。

3. できる、わかる、身につく

こうした状況を分析する際に、ポランニーの論考は重要な視点を与えてくれる。彼の論考に従えば、上記の実践の状況においては、対象世界に向き合う際の知識、道具の使用に焦点化されており、それが向かう先の世界が存在していない。よって手順の習得＝「できる」レベル、うまくいってもその間の関係性が理解される＝「わかる」レベルに留まっている。しかし、知識にはそれが向かう先があるのであり、そこに潜入しなければならない。またそのためには、知識は暗黙化、内面化、身体化されなければならないという。別の言葉で言えば、「身につく」状態になっている必要がある。それは身構え、態度、姿勢という評価困難なものとして現れてくるだろう。

このレベルの知性を育てることは、半期 10 数回の講義、演習では困難かもしれない。しかし、高度で、深いレベルの知識を育成するという大学教育の目的を達成するためには、このレベルの知へのアプローチが必要と考える。一部の講義、演習ではこうしたことが達成されているのかもしれない。しかしそれがいかなる機序で行われるのか、不明な点は多い。またそこでは授業者の努力だけでなく、受講者の知的協力も必須だろう。様々な試みの中に散在する、次のステップへの契機を参加者の方々と討論したい。